

住民向け在宅療養推進フォーラム ～住み慣れた我が家で暮らし続けるために～

日時：平成27年12月19日 場所：ゲストハウスアーバン 参加者：104名

病気があっても住み慣れた「我が家で」最期まで暮らし続けたいと希望したら、医療と介護の多職種が連携・協働して、願いや、思いをかなえられるような在宅療養システムがあります。



訪問診療の取り組みと、今、皆さんにお伝えしたいこと

村岡外科クリニック 院長
村岡正朗氏

患者さんが在宅で生活する際には、たくさんの事業所や関係機関が支援します。患者さん、ご家族がそれぞれの支援者と信頼関係を築くことはもちろんですが、支援者同士も連携していかなくてはなりません。私たちは多職種が連携して支援できるようにそれぞれの支援者の職種やサービスの内容等を学ぶ勉強会を行っています。

また、「リハビリテーション」は、「身体的」「精神的」「社会的」「経済的」「職業的」な能力を有するまでに回復させることであり、「移動」「作業」「コミュニケーション」に関する活動障害を解決するための治療です。具体的な目標をもって行うことが効果的です。漠然と「リハビリをすればなんとかなる」では時間の無駄だと思いません。在宅でもリハビリテーションはできますので、ケアマネジャーに相談してみましょう。

1 おうちに帰るための気仙沼市立病院リハビリテーション室の取り組み

気仙沼市立病院 リハビリテーション室
中谷ひろみ氏

平成26年度の統計をもとに市立病院リハビリテーション（以下リハビリ）室の現状と退院支援の取り組みについて話しました。

1年間の入院患者の約80%が60歳以上の患者で、リハビリの指示はほぼ全科から出され、入院患者の約40%がリハビリを受けている状況でした。患者の高齢化に比例しリハビリの需要も高くなっていました。

リハビリ患者の65%が自宅退院しており、急性期後の回復期リハビリが必要な場合でも、当地区にはその病院や施設が少ないため、十分な回復期リハビリを受けられないまま早期に自宅に退院せざるを得ない状況がありました。

リハビリ室では、患者や家族ができるだけ安心して退院できるようにと介入早期からカンファレンスの実施、院内の多職種間での情報共有、地域の関連職種との連携を図るなどしており、その具体的な取り組みを紹介しました。

※追記 新病院移転後、平成30年1月に回復期リハビリ病棟が開設（24床）され、令和3年11月現在36床で稼働中です。

